

子宮がん検診（施設）

動 向

平成15年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん15,894名（前年度比292名増）、体がん2,545名（前年度比15名減）であった。受診者数は前年よりも若干増加した。

最近の研究によると、子宮頸部がんの多くは、性感染症であるヒトパピローマウイルス（HPV）が関与していると言われている。そのため、性活動が活発となる若い年齢層では、初交年齢の低下とあいまって罹患率が上昇傾向にある。そのため、平成16年に厚生労働省は、老人保健事業に基づく子宮がん検診について検診対象年齢を20歳以上とし、受診間隔を2年に1度とする新しい指針を公表した。これを契機として、若い年齢層の検診の受診、特に初診の人の掘り起こしが望まれる。

子宮頸がん検診

2003年度の子宮頸がん検診受診者数は15,894名（初診24.9%）、50歳未満の若年層（44.4%）、50歳代が最も多く、次いで40歳代、60歳代の順である。要精検率0.72%、要再検率1.20%、両者合わせた要再精検率は1.92%である。検出されたがんは17例、全例頸がん（扁平上皮がん16例、腺がん1例）である。がん発見率は0.11%、初診に高く（0.33%）、若年層に高く（0.18%）、年齢階級別では29歳以下0.33%、30歳代0.24%、40歳代0.14%、50歳代0.33%、60歳以上0.03%である。

早期がん（0期・1a期）が、扁平上皮がん16例中13例（81%）と高率に検出され、早期診断・早期診療が可能となり、当該症例の方々の人生に多大な貢献をしたことになる。検出された早期がんは、年齢階級別では29歳以下1例（初診）、30歳代4例（初診3例）、40歳代6例（初診5例）、50歳代1例（初診）、60歳以上1例（初診）など、初診・若年層に極めて多いことが確認されます。

検出された異形成は82例（軽度66例、中等度12例、高度3例、腺異形成1例）である。異形成発見率は

0.52%、初診に高く（0.61%）、若年層に高く（0.42%）、年齢階級別では29歳以下1.31%、30歳代0.95%、40歳代0.43%、50歳代0.40%、60歳以上0.42%である、などから初診、若年層に極めて高いことが確認されます。

検出されたがん、異形成の頸部細胞診クラス別検出率はⅡ再検21%、Ⅲa88%、Ⅲb100%、Ⅳ100%、Ⅴ100%である。検出された頸部腺がん1例は初診62歳無症状の方で、クラスⅣから検出された。本年度の子宮頸部細胞診精度管理総合評価（病変有無追跡確定率73.7%）は、感度100%、特異度99.8%、正診率99.9%、陽性的中率90.5%、陰性的中率100%と適正である。

子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は2,545名で、頸がん検診受診者の16%である。頸管狭窄などの理由で吸引チューブが挿入できず、経膈超音波法による内膜厚測定に変更した症例（細胞採取不能例）127名を除いては、増淵式吸引法による内膜細胞診を実施した。内膜細胞診の結果、要再検10例、要精検7例（疑陽性4例、陽性3例）の再精検が指示された。その内要精検7例から、体部腺がん3例（1a期1例、1b期2名）と卵巣がん1例が検出された。内膜の萎縮、出血等が原因で細胞採取量不十分のため判定不能になった症例は87例（3.4%）である。

卵巣がん検診

一次検診で内診の結果異常を触知された方、または希望者に対し経膈超音波法・腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設している。2003年度の受診者は307名（前年度346名）である。その中から卵巣がん0名、卵巣のう腫7名が発見されました。

関係の集計表は78頁に掲載